

# 琉球大学学術リポジトリ

《音楽科》音楽にかかわる言葉で語り合える生徒の育成：  
音楽的な見方・考え方を働かせる音楽鑑賞の授業デザイン

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2020-08-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下門, 健吾, 小川, 由美, 服部, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/46649">http://hdl.handle.net/20.500.12000/46649</a>

# 音楽にかかわる言葉で語り合える生徒の育成

## — 音楽的な見方・考え方を働かせる音楽鑑賞の授業デザイン —

下門健吾\* 小川由美\*\* 服部洋一\*\*

\*琉球大学教育学部附属中学校 \*\*琉球大学教育学部

### I 主題設定の理由

#### 1 社会的な背景から

音楽科として育成を目指す資質・能力は「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」<sup>①</sup>である。中央教育審議会答申では、音楽科においても「音楽表現を創意工夫したり、音楽のよさや美しさを味わって聴いたりするためには（中略）音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるよう指導を工夫することが大切」<sup>②</sup>だとしている。今年度は、昨年度の「音楽で語り合える生徒の育成」という主題をさらに具体化させ、「音楽にかかわる言葉で語り合える生徒の育成」とした。ただし、音楽科での言語活動は音や音楽そのものに対する知覚・感受が核にあり、言語だけのやり取りでは音楽科の学習として意味を成さない。そのため、本主題を実現する過程の中でただ単に音楽を聴いて感想を述べたり、音楽表現について言葉だけでやり取りすることを目指しているのではなく、音楽に対して生徒がどのような思いや意図をもって鑑賞したり表現したりしているかが重要となる。今回実践する鑑賞領域に限定して言えば、それは「その音楽を聴いてきた今、音楽のもつ面白さや魅力を他者に向けて伝えたい」という思いを生徒が抱くことである。そこで本校音楽科では、「音楽にかかわる言葉で語り合える生徒の育成」を目指し、音楽的な見方・考え方を働かせる音楽鑑賞の授業をデザインしていく。

#### 2 これまでの研究から

本校音楽科では、昨年度「創作の活動」において研究を行った<sup>③</sup>。その成果と課題は以下の通りである。

#### (1) 成果

- ①感性を働かせて音を選択し、音の組み合わせによって生み出される雰囲気の違いについて知覚・感受しながら、必要な知識を習得していく姿が見られた。
- ②対話的な学習活動を通して表現したいイメージが他者と共有、具体化され、音や音楽に関わる言葉で語り合う姿が見られた。
- ③実生活と音楽との接点を見だし、旋律創作に意欲的に取り組む姿が見られた。

#### (2) 課題

- ①学習に苦手意識をもつ生徒も含めて、生徒が主体的に学ぶための手立て
- ②生徒に自身の気づきや思考を自覚させるための工夫
- ③教師が生徒の気づきや思考を見取る評価方法の工夫

### II 研究の目的

本研究の目的は、学習活動の中で音楽的な見方・考え方を働かせることにより、音楽にかかわる言葉で語り合う生徒を育成することにある。

### III 目指す生徒像

- 1 思いや意図をもち、音楽に関わる言葉で互いに語り合う生徒。
- 2 自己のイメージや感情、実生活や社会と音や音楽とのつながりを見だし、主体的に音楽に親しもうとする生徒。

## IV 研究内容

### 1 音や音楽及び音楽にかかわる言葉で語り合える生徒とは

「音楽にかかわる言葉で語り合える」生徒とは、出会う音楽に対して知覚・感受を繰り返しながら音楽的な見方・考え方を働かせることにより、音や音楽のよさや美しさなどについて自分なりの思いや意図を持ち音楽表現を創意工夫したり、音楽を味わって聴いたりする生徒である。音楽にかかわる言葉で語り合うことを通して、音や音楽の及ぼす自分のイメージや感情または音楽と生活や社会との関わりについて考えることは、生徒が音や音楽そのものの価値、また音楽を表現したり鑑賞したりすることの意味や価値を自分なりに見いだすことにつながる。それを積み重ねることで、生徒の生涯にわたって音楽文化を愛好する心情や態度がはぐくまれていく。音楽学習を通して、音楽にかかわる言葉で語り合える力を身につけることにより、生徒は今以上に自分自身と音楽とのつながりを自覚し、学びを深めていけると考える。

### 2 音楽鑑賞における授業デザイン

#### (1) 音楽的な見方・考え方

学習指導要領では、音楽的な見方・考え方とは「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」であり、それは「音楽的な見方・考え方を働かせた音楽科の学習を積み重ねることによって広がったり深まったりするなどし、その後の人生においても生きて働くものとなる」<sup>4)</sup>とされている。また山崎(2018)は、音楽的な見方・考え方について「学校で音楽を学ぶことがなくなってもなお、衰えることのない資質・能力」であり、年齢と共に衰えてしまう技能に比べて「日々の学習の積み重ねによって刺激されて働き始めた感性は年齢を重ねても、その鋭敏さは保たれ、生き方の質に寄与するもの」<sup>5)</sup>だと述べている。日々の音楽の学習の中で音楽的な見方・考え方を働かせながら感性を刺激し思考することは生徒の豊かな人生づくりにも寄与すると言える。特に音楽鑑賞においては生徒が音楽的な見方・考え方を働かせて聴くことが、音楽のよさや美しさを味わって聴くことにつながる。

#### (2) 音楽のよさや美しさを味わって聴いている姿

音楽のよさや美しさを味わうとは、学習指導要領によれば「例えば、快い、きれいだといった初発の感想のような表層的な捉えに留まることなく、鑑賞の活動を通して習得した知識を踏まえて聴き返し、その音楽の内容を価値あるものとして自らの感性によって確認する主体的な行為」<sup>6)</sup>である。また音楽科における鑑賞領域の学習は「音楽によって喚起されたイメージや感情などを、自分なりに言葉で言い表したり書き表したりして音楽を評価するなどの能動的な活動によって成立する」<sup>7)</sup>としている。山崎(2012)は鑑賞指導が単なる活動で終わってはいけないことを強調し「自らが音楽から感じ取ったことや、音楽を聴いていて思ったこと考えたことを他者に分かりやすいように、論理的かつ端的に説明できる力を児童生徒に身につけさせなくてはな」<sup>8)</sup>らないと、鑑賞指導を通して教師が生徒に身につけさせるべき能力についても言及している。

#### (3) 実感を伴った理解による知識の習得

生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成には、実感を伴った理解による知識の習得が不可欠である。芸術系教科・科目における「知識」とは「自己との関わりの中で理解する」ものであり「一人一人が感性などを働かせて様々なことを感じ取りながら考え、自分なりに理解し、表現したり鑑賞したりする喜びにつながっていくもの」<sup>9)</sup>と中央教育審議会答申に示されている。知識の習得が教師からの一方向的な伝授によるものであるとすれば、それは学習者にとっては無意味なものである。学習過程で生まれる疑問を出発点とし、学習内容に対する興味関心が刺激される中で「なるほど」「そういうことか」と生徒が実感として納得し、自ら能動的に習得していくことが、実感を伴った理解による知識の習得であると本校音楽科では考えている。

以上より、本校音楽科では、音楽の良さや美しさまたは面白さを実感をもって習得した知識を織り交ぜながら、それまでの学習過程を通して知覚・感受したことを根拠をもって批評する(他者に伝えられる)ことが、音楽鑑賞における音楽的な見方・考え方を働かせて音楽のよさや美しさを味わって聴いている姿だと捉えている。

### 3 具体的な取り組み

音楽科の鑑賞指導において主体的な学びを実現させようとするとき音楽によって喚起されるイメージや感情を自覚させることが重要であり、その音楽を評価するというような能動的な活動によってその音楽の内容を価値あるものとして自らの感性によって確認する機会を生徒が得ることが大事である。

本校音楽科では、昨年度課題の解決に向け「どの生徒も参加できる学びの環境」と「生徒の学びの自覚化を促す教師の働きかけ」の2点について取り組むこととし、以下にその具体的な内容を述べていく。

#### (1) どの生徒も参加できる学びの環境

##### ① 学び合う環境づくり

音楽科の学習を苦手とする生徒にとって、音や音楽に対する知覚・感受を自分なりの言葉で表現するという行為は容易ではない。そこで、本校音楽科では個々の気づきを出しやすくするために付箋を活用しペアによる学習活動を進める。例えば、第1時では鑑賞曲の主題が聴き取れたら、ペアで「主題が聴こえたよね？今の主題だよね？」と対話しながら二人が納得した上で付箋を貼っていくという活動を設定する。二人で相談をしながら活動することで気づきや思いを言葉で出しやすくなり、また互いに納得した気づきや思いは学級全体の場でも安心して発信できるようになるだろう。

##### ② 音楽の要素や構造が「わかる実感」を持たせる

音楽の学習に対して苦手意識をもつ生徒へは、音楽の要素に着目させ段階的に疑問や課題を解決していく必要がある。山崎（2018）は、「音楽科における主体的な学びについては生徒の意識を学びに向けることがまず必要とな」とし、『『それまで聴き取れなかった音が聴き取れた』『音楽の雰囲気が感じ取れた』『それまでできなかったことができた』『それまで知らなかったことがわかった』など、教師の計画に基づく音楽経験を実感していく<sup>(10)</sup> ことの連鎖が主体的な学びを実現させると述べている。本校音楽科では第1時において、①主題の旋律を知覚→②主題の反復を知覚→③主題の変化を知覚→④主題の反復・変化による曲想の変化を感受、というようにペアで対話しながら、スモールステップを踏みつつ段階的に音楽の諸要素や構造に対する知覚・感受を積み重ねていくことで、「わかる実感」を持たせていく。

#### (2) 生徒の学びの自覚化を促す教師の働きかけ

生徒が自分の学びや学びの状況を自覚することで、より主体的な学びが実現されると考える。生徒の学びの自覚化を促す手立てとして、以下の3つに取り組む。

##### ① 生徒の気づきや思考を目に見える形にする

山崎（2012）は音楽鑑賞指導によってみとるべき基礎的な学力として①「ある音楽からあるものが聴き取れている」ことと、②「ある音楽から何かが感じ取れている」ことの2点を挙げている。その上で生徒が「聴き取ったこと（客観）と感じ取ったこと（主観）をつなぎ合わせる」ことによって生徒の思考の具体性が増し、そこから「何らかの学力を見取ることが可能になる<sup>(11)</sup>と述べている。音楽を聴いて生徒の内面に生まれたイメージや感情は目には見えない。この見えないもの（自覚しているかどうか自覚することが難しいもの）を見える形にし、「自分がこう感じた（感受）のは、音楽がこうなっていたからだ（知覚）」と知覚と感受を結びつけることが、苦手群の生徒の学びの自覚化を促し、学びを深めることにつながると考える。そこで本校音楽科では、本題材においてみとりたい生徒の思考を以下の方法（表1）でみとっていく。

表1 みとりたい生徒の思考とみとりの方法

時	みとりたい生徒の思考	みとる方法
第1時	主題の反復・変化に対する知覚	主題をロズさむ姿や、貼られた付箋の枚数、貼り方の違い
	主題の反復・変化に対する感受	発言内容や付箋に書かれた記述内容
第2時	主題が反復・変化し、追いかけるように次々と折り重なっていくというフーガの特徴の理解と、それに対する感受	ワークシートへの記述内容
第3時	主題が反復・変化し追いかけるように次々と折り重なっていくというフーガの特徴の理解やそれに対する感受と、文化的な背景やパイプオルガンの音色と曲想との関わりへの理解	前時のワークシートから発展させた批評文
第4時	主題が反復・変化し追いかけるように次々と折り重なっていくというフーガの特徴の理解やそれに対する感受と、文化的な背景やパイプオルガンの音色と曲想との関わりへの理解。また「フーガ短調」への自分なりの価値づけ（音楽のよさや美しさを味わって聴いている姿）	推敲された最終的な批評文

## ② 自覚的学びの積み重ね

田村 (2018) は深い学びとは「それまでに身につけていた知識や技能を存分に活用・発揮し、その結果、知識や技能が相互に関連付けられたり組み合わせられたりして、構造化したり身体化したりしていくこと」<sup>(12)</sup> と述べている。本校音楽科では生徒の思考を見える形にすることに加え、単元や題材を通して、音や音楽に対する知覚・感受を繰り返し、その時その時に見いだした(自覚した)音楽のよさや面白さを少しずつ言葉にしていき、それを積み重ねる(関連付けたり組み合わせられたりする)ことで、自身の考えを広げていけるような自覚的学びの積み重ねを行う。図1は「感性を働かせた思考」と「音楽に対する認識」が、両者を往還しながら相互に深まっていく「自覚的学びの積み重ね」を示したものである。

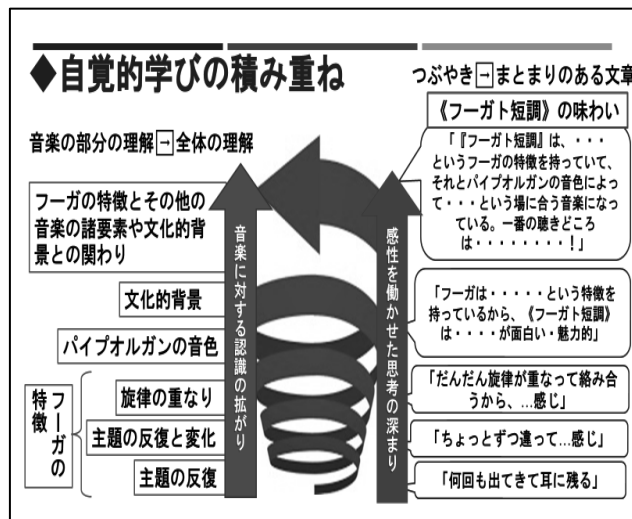


図1 本題材における自覚的学びの積み重ね (小川作成)

## ③ 苦手群の生徒の音楽理解の特徴をみとる

先述したように、学習苦手群の生徒にとって音や音楽に対する知覚・感受を自分なりの言葉で表現するという行為は容易ではない。そう考えると「言葉にできていない(ワークシートへ記述内容が不十分)から、その生徒は音楽に対する知覚・感受がなされていない」という判断には、検討の余地がある。「言葉にできなくとも、形式や構造を音や音楽として理解している」生徒がいるかもしれない。そこを教師がみとり、適切に評価していくことで生徒の主体的な学びの実現につなげていきたいと考える。そこで本校音楽科では鑑賞テストを行うこととした。実施は2020年2月(授業実施から約3ヶ月後)の定期テストにおいてである。鑑賞

テストでは、授業では扱っていない(生徒にとっては初めて聴くであろう)3つの音楽を聴かせ、それぞれはフーガの形式で書かれた音楽か、そうでないかを問う。「言葉にできなくとも、形式や構造を音や音楽として理解している」生徒のみとりに加え、フーガの学習を終えてから一定期間が経過してもフーガの概念を生きた知識として理解しているかどうかをみとっていく。

## V 授業実践

### 1 2学年実践事例

#### (1) 題材について

題材名：旋律が変化しながら追いかけるように重なり合っていくおもしろさを味わおう

対象：2学年

教材：《フーガ短調》/J.S.バッハ

#### (2) 題材の目標

主題が反復・変化しながら追いかけるように次々と折り重なっていくフーガの特徴を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じたことと、《フーガ短調》の生まれた背景やパイプオルガンの音色と曲想とのつながりを理解しながら、《フーガ短調》のよさや面白さを味わって聴くことができる。

#### (3) 本題材で育成したい資質・能力

##### ① 知識・技能

主題が反復・変化しながら追いかけていくフーガの特徴を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じることを通して、フーガ特有の曲想や面白さをその特徴や音楽の構造と曲想との関わりにおいて理解する力

##### ② 思考力・判断力・表現力等

音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりを理解し、解釈したり価値を考えたりしながら根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴く力

##### ③ 主体的に学習に取り組む態度

フーガの特徴やパイプオルガンの音色と曲想との関わりに関心をもち、鑑賞に関わる知識を得たり生かしたりしながら、音楽のよさや美しさを味わって聴く学習に意欲的に取り組む態度

## 2 本実践の目的

フーガの特徴と曲想との関わりについての知覚・感受を通し、フーガの特徴やそれが生まれた文化的背景について考えさせ、そのおもしろさを味わって聴く力を育てる中で、生徒の音楽的な感性を働かせ、音楽にかかわる言葉で語る力を育成することを目的とする。

## 3 実践内容

### (1) 学習指導要領との関連

#### B 鑑賞

- ア (ア) 曲や演奏に対する評価とその根拠
  - (イ) 生活や社会における音楽の意味や役割
  - (ウ) 音楽表現の共通性や固有性
- イ (ア) 曲想と音楽の構造との関わり
  - (イ) 音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わり
  - (ウ) 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性

表2 本題材で扱う共通事項

音色	パイプオルガンの音色
テクスチャ	音の重なり方
形式	フーガ
構成	反復、変化、

### (2) 題材の評価規準

#### ○音楽への関心・意欲・態度

フーガの特徴やパイプオルガンの音色に関心を持ち、意欲的に《フーガ短調》を聴いてその味わいを人に伝えることができている。

#### ○鑑賞の能力

フーガの特徴やパイプオルガンの音色について理解して曲全体を味わい、その味わいを人に伝えている。

表3 具体の学習活動における資質・能力の評価とその方法

第1時	判・表・思	主題の反復と変化を知覚・感受している。【第1時：発言・ワークシート】
	に学習 主体的	主題の反復と変化に注意を向けて聴いている。【観察・ワークシート】

第2時	知識・技能	主題が反復・変化しながら追いかけるようにあられ、旋律が重なり合っていくフーガの特徴について理解を示している。【ワークシート】
	断・表現 思考・判	★主題のあられかたや旋律の重なりを知覚・感受している。【発言・ワークシート】
	習に向かう 主体的に学	主題のあられ方や旋律の重なりに注目して聴いている。【第2時：観察・ワークシート】
第3時・第4時	知識・技能	★フーガの特徴とパイプオルガンの音色との関わりを捉え、文化的背景もふまえて曲の味わいを人に伝えている。【批評文】
	現 思考・判断・表	★フーガの特徴やパイプオルガンの音色について知覚・感受したことを手がかりに、曲全体の味わいを人に伝えている。【批評文】
	かう態度 主体的に学習に向	★フーガの特徴とパイプオルガンの音色との関わりや文化的背景をふまえて、自分の味わいを人に伝えようとしている。【批評文】

★は最終的な成果を評価する学習場面

### (3) 学習活動

以下の表4のように題材計画を立て授業を進めた。

表4 題材計画 (全4時間)

時	学 習 活 動
第1時	ペアで協力しながら『フーガ短調』の主題を聴き取り、主題が反復・変化することによって生み出される曲想の変化を感じ取って言葉にする。
第2時	《フーガ短調》の主題が追いかけるように出てくるとや旋律が重なっていくことに注目して聴きフーガの特徴について理解し、その味わいを伝え合う。
第3時	フーガの面白さとパイプオルガンの楽器の音色との関わりを捉え、『フーガ短調』が作曲された文化的背景を理解した上で、『フーガ短調』の味わいについて批評文にまとめる。
第4時	互いの批評文を交流し、フーガの面白さとパイプオルガンの楽器の音色との関わりを新たな視点で捉え、《フーガ短調》が作曲された文化的背景を理解した上で、《フーガ短調》の味わいについて自分なりの価値づけをしながら批評文にまとめる。

## 4 実践の考察

### (1) 生徒の学習の評価

表5は第3時と第4時に生徒Aが書いた批評文である。生徒Aは、学習苦手群の一人である。集中を持続させることが難しく、また耳で聞いた情報を正しく理解することに苦手が見られる。また自分の考えを相手にわかりやすく伝えることや、文章で表現することも苦手な生徒である。第3時の批評文は第2時まで学習した内容を踏まえて自分なりにフーガ短調のおもしろさをまとめたものである。第4時の批評文は、それぞれの生徒が書いた批評文をグループで発表・交流し「どうしてA評価の批評文は、フーガ短調の面白さ(魅力)が伝わるのだろうか」という問いを立てグループで意見交流した後に、批評文を書く視点を再度全体で共有し、曲を鑑賞し、各自で自分の書いた批評文を推敲したものである。

表5 生徒A：第3時・第4時における批評文の記述内容  
(原文ママ、下線及び波線は筆者による)

第3時	フーガ短調では、 <u>主題が反復して、追いかけている感じがします</u> 。リズムは早くて、教会でお祈りしているような曲です。バッハは何千本の曲を作って小さい頃に行ったのが教会らしく、だからフーガ短調を作ったみたいで、楽器がとてもしずく、パイプが4000本ぐらいあって3段のけんばんプラス足にもけんばんが置いてあり、一人でひいているけど、重なった音も出せる楽器だからフーガ短調もひけると思う。
第4時	フーガ短調は、バッハが教会で演奏するために作ったパイプオルガンとって空気の方で音を出しています。 <u>この曲のはじめは、主題だけで悲しいイメージだと思ったけど、後から主題が反復し折り重なっていることで、にぎやかになってると感じました</u> 。それが次々と出てくることによって「 <u>逃げています</u> 」イメージがついています。この曲は、さっきも言ったとおり、空気の方で曲が流れていて、とても美しい曲がうまれるし、より「にげている」を強調できる楽器と思いました。 <u>悩んでいる人とかこまっている人の心に響く音になっている</u> と思います。それがフーガの特徴と思う。

評価の規準は「①フーガの構造(主題の反復と変化)に対して知覚・感受している」「②フーガの構造(主題の反復と変化)に対する知覚・感受と結び付けて文化的背景を理解している」の2点であり、特に①が書けていなければ授業のねらいが達成されていないことになる。生徒Aのふたつの批評文を比較すると、この授業で身につけさせたい最も基礎的な学力である「①フーガの構造(主題の反復と変化)に対して知覚・感受し

ている」ことが、第3時では「主題が反復して、追いかけている感じがします」から、第4時では「この曲のはじめは、主題だけで悲しいイメージだと思ったけど、後から主題が反復し折り重なっていることで、にぎやかになってると感じました。それが次々と出てくることによって『逃げています』イメージがついています」とより具体性が増し、知覚・感受による音楽の捉えが実感を伴った表現になっている。また両方において文化的背景(=教会のために作曲された音楽であること)に触れながら、特に第4時の批評文では、「悩んでいる人とかこまっている人の心に響く音になっていると思います」と、教会で流れるこの音楽を聴く人たちに思いを巡らせ、人々の生活にとってこの音楽がどのような価値があるのかという、生活や社会と音楽との関係性を見だし、そこに自分なりの価値づけを行っている。文章の書き方として課題は残るが、音楽を鑑賞して知覚・感受したことをその文化的背景と結び付けて自分なりに価値づけている姿を見ることができる。これは、一連の学習を通して「音楽の聴き方」が広がったことにより音楽文化への理解が深まった姿だと評価できる。また鑑賞テスト(2月10日実施)において生徒Aは「フーガの形式で書かれた音楽」と「フーガの形式で書かれていない音楽」とを完璧に聴き分けている。その後2月19日に生徒Aに再び3曲を聴かせながらインタビューを行った。以下表6はインタビューにおける教師と生徒Aの会話の内容である。

表6 生徒Aへのインタビューにおける会話の記録  
(表中のTは教師、Aは生徒Aの発言内容)

(1 曲目を聴かせながら)
T: これ、フーガになってる?
A: なってる。
T: なってるよね。
なんで(フーガに)なってるってわかった?
A: んーなんか最初の音…音が、あの、最初の音が鳴って、なんか、また、あの次の音と…が出てきたときに、それがなんか、最初の音となんか混じってる。
T: あー、それがわかるんだ。
じゃあふたつめの曲はどう?
(2 曲目を聴かせる)
T: これはフーガ?
A: ううん。(と首を横に振る動作)
T: ちがうよね、なんでね?
A: なんか、最初の音が、あの、あとに、なんか、出てきてないっていうか。
T: そうだね。

(3 曲目を聴かせながら)

T: これは?

A: フーガ。

T: フーガだよ、(生徒Aの名前を呼び) すごいねー。  
なんでわかる?

A: なんか最初の音が結構わかりやすく、後の音にも最初の音と同じ…みたいにリズムで流れてきて…出てきてるから。

T: 最初の音とき、まったく同じ音で流れてきてる?

A: んー、ちょ…んー。

T: 何か変わってる?

A: ちょっと変わってる。

T: 何が変わってると思う?

A: なんか、他の、なんか音が入ってきたから。なんか、うーん…高さかな?

T: そうだね、そうそう高さが変わってるね、音のね。

T: じゃあ、フーガって何ですかって言われたら、  
なんて答える?

A: んーと、主題の、あの、なんか、なんか、えーっと…なんか…主題が繰り返されてる?…って言うのかな。…え、忘れた。なんだっけ。

インタビューからみとれるのは、生徒Aがフーガの形式的特徴である主題の反復と変化を理解し、それを初めて聴く楽曲へも応用しているということである。生徒Aが言う「最初の音が、後の音にも最初の音と同じ…みたいにリズムで流れてきて…出てきてる」というのは主題の「反復」のことであり、「なんかー、他の、なんか音が入ってきたから。なんか、うーん…高さかな?」という発言は、主題がそのまま反復されるのではなく「音の高さが変化して反復される」こと(=フーガの形式的な特徴)を捉えたものである。授業を終えて3ヶ月が過ぎてもフーガという音楽の形式を言葉にはできないが識別している姿をみとることができる。

一方で、「フーガとは?」という教師の質問に対する「んーと、主題の、あの、なんか、なんか、えーっと…なんか…主題が繰り返されてる?…って言うのかな。…え、忘れた。なんだっけ。」という発言は、「音や音楽」そのものと「音楽に関わる言葉」が十分につなげられていない(両者が別物として存在している)状態とも言える。フーガの形式的特徴を識別できてはいるが、それが「反復や変化」という音楽用語としての知識の習得にまでは至っていないのである。これは、知覚面だけでなく、知覚と感受が結びついて「自分の中でフーガとはこういうもの」という認識にまでは至っていない姿(課題)だと言える。

## (2) 授業デザインのふり返り

本題材では《フーガ短調》の鑑賞を通して、ペアで学び合う環境の設定や自覚的学びを積み重ねる視点で授業をデザインした。それにより生徒が自分とは違う(または同じような)他者の考えや感じ方に触れ、自分自身と比較しながら学びを積み重ねることで、これまでの音楽の聴き方とは違う「新たな聴き方」を発見し、音楽への理解を深め、興味関心を深めたことが成果である。一方で、学習が苦手な生徒にとっては「音楽の特徴を感覚的にはわかっているけれども、それを言葉で説明することはハードルが高い」という課題も見えてきた。また、批評文として書かれた内容がフーガの構造に対して知覚・感受することよりもパイプオルガンの音色や楽器の構造に偏っていたものもあった。これは批評文を書かせる活動の直前にパイプオルガンについての映像を見せたことで、生徒の中に強い印象が残っていたためだと考えられる。また「フーガ」という言葉の語源「fugere=逃げる」は本来フーガの構造的な特徴を示したものであるが、それに関する教師の説明を《フーガ短調》の感受や味わいを示す例として捉えてしまっている生徒が多かったことも課題である。

## (3) 実践を踏まえた授業の改善点

まず第2時に主題が反復・変化し追いかけるように折り重なっていくことによる曲想の変化と文化的側面とを結び付けられるような発問や授業構成を検討する必要がある。また、生徒が批評文を書く際の視点を確実に捉えさせるために、主題の反復・変化に対する知覚・感受を必ず入れて書かせることや、文化的側面を主題の反復・変化に対する知覚・感受と結び付けて書かせるというような、批評文を書かせる際の「問いの立て方」の工夫が必要である。また生徒がフーガの語源「逃げる」を《フーガ短調》の味わいとして捉えそこに固執してしまうことのないよう(音楽の知覚・感受をもとに音楽そのものから思考させるために)、生徒へ提示する情報の内容や提示するタイミングについてもさらに検討していきたい。

そして、学習苦手群の生徒の音楽理解や、音楽に対する知覚・感受をみとる方法や、それを生徒に自覚させる教師の働きかけに関して、さらなる改善が必要である。



## VI 成果と課題

### 1 成果

本研究の成果は以下の通りである。

#### (1) どの生徒も参加できる学びの環境

- ①学び合う環境を教師が意図的に組み込み授業をデザインすることで、特に学習苦手群の生徒も音楽に対する知覚・感受を広げ、意欲的に学ぶ姿が見られた。
- ②音楽の要素や構造がわかる実感を持たせるために、付箋などを活用しながら段階的にスモールステップを踏むことで、学習苦手群の生徒もペアで対話しながら主体的に学ぶ姿が見られた。

#### (2) 生徒の学びの自覚化を促す教師の働きかけ

- ①目には見えない音楽に対する知覚・感受を付箋や、映像資料、ワークシート等で見える形にし、それをもとに他者と交流することで、音楽の要素や構造と曲想との関連を自分なりに捉え、言葉で表現する姿が見られた。
- ②題材の終わりにだけ批評文を書かせるのではなく、単元の途中で自分の知覚・感受や考えをアウトプットさせることや、批評文を生徒同士が相互評価させるというように段階を追って自覚的学びを積み重ねることで、生徒の音楽の聴き方が広がり、音楽に対する理解を深める姿が見られた。
- ③苦手群の生徒へのインタビュー調査から、音楽の特徴について言葉で表現することはできない生徒も、音や音楽そのものとして音楽の特徴を理解していることがわかった。
- ④評価規準を見直すことで、苦手群の生徒が記述した少ない言葉の中にも「音楽に対して知覚・感受している姿」をみとることができた。それにより発問や問いの立て方の工夫といった教師として授業改善の視点を得た。

### 2 課題

本研究から見えてきた課題は以下の通りである。これらの課題を踏まえて次年度研究につなげていきたい。

- ①評価規準と評価方法の工夫改善（特に学習苦手群のみとりの方法）
- ②問いや発問の工夫
- ③音楽理解と言葉の表現への手立て（音楽に対して知覚したことと感受したことを結びつける手立て）

## VII 引用文献・参考文献

- (1) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』教育芸術社、2018年、p.6
- (2) 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』2016年12月
- (3) 琉球大学教育学部附属中学校『研究紀要』第31集、2018年
- (4) 上掲（1）p.10-11
- (5) 加藤徹也、山崎正彦『中学校新学習指導要領 音楽の授業づくり』明治図書、2018年7月、p.9
- (6) 上掲（1）p.58
- (7) 上掲（1）p.30
- (8) 山崎正彦『見つけよう音楽の聴き方聴かせ方—新学習指導要領を活かした音楽鑑賞法』（株）スタイルノート、2012年4月、p.42-43
- (9) 上掲（2）
- (10) 加藤徹也、山崎正彦『中学校新学習指導要領 音楽の授業づくり』明治図書、2018年7月、p.11
- (11) 山崎正彦『見つけよう音楽の聴き方聴かせ方—新学習指導要領を活かした音楽鑑賞法』（株）スタイルノート、2012年4月、p.34、p.41
- (12) 田村学『深い学び』東洋館出版社、2018年4月、p.36